

ガファールに見る UMNO 史の一側面

左右田直規

今年の 4 月 23 日、マレーシアの副首相や統一マレー人国民組織 (UMNO) 副総裁を歴任したアブドゥル・ガファール・ババ (Abdul Ghafar Baba) が亡くなった。81 歳だった。

ガファールは、マハティール政権期の 4 名の副首相のなかでは、比較的地味な印象を与えてきたのではないだろうか。彼の死はマレーシアの主要な新聞や TV ニュースのトップで報道されたが、必ずしも国民の大きな関心を引いたとはいえない。

しかし、見方を変えてみれば、彼の政治家人生には、UMNO 史の「もうひとつの側面」が刻印されているともいえる。「保守派のマレー人エリートの政党」という一面だけでは語り尽くせない UMNO の歴史を、彼の生涯の中に見ることができるのである。

UMNO と地方教員

第一に、ガファールの政治的経歴の中から、UMNO における地方教員の役割がうかがえる。

ガファールは、1925 年にヌグリ・スンビランのクアラ・ピラで 10 人きょうだいの 6 番目の子として生まれた。両親はゴムの樹液採取、稲作、野菜栽培など種々の仕事を行っていたが、大勢の子供を養うのに精一杯だった。彼は、6 歳の時に母親と、2 年後には父親とも死別し、後にマラッカのおじの家にはひきとられた。おじの家業を手伝いながらマレー語小学校を修了し、1940 年に小学校の見習い教員となった。小学校教員は、マレー語教育しか受けていない当時のマレー人庶民層に開かれた数少ないホワイトカラー職のひとつだった。

日本占領期にマラッカの興亜訓練所で日本語を学んだガファールは、修了後に同校の教員として採用された。広島への留学が決まっていたが、日本の敗戦により実現しなかった。留学の時期がもっと早ければ、広島で被爆していたかもしれない。後に政治家となったガファールは、日本人相手のスピーチや交渉の際に、時折、日本語を交えていたという。

終戦を迎えた後、ガファールは、1946 年から 3 年間に渡ってスルタン・イドリス師範学校で正規の教員養成教育を受けた。折しもインドネシアの独立戦争の最中であり、彼もスカルノやハッタらの闘争に強い関心を抱いたという。卒業後の数年間はマラッカで教員生活を送り、一時期、マラッカ・マレー人教員協会の役員も務めた。

田舎の知識人である地方教員は、村長や地主などと並んで、かつての UMNO の地方指導者の重要な供給源のひとつだった。他方、国政の中枢における教員出身の政治家の数は限られていたが、それでも、ラーマン政権期には、アブドゥル・ラーマン・タリブ (元教育相) やセヌ・アブドゥル・ラーマン (元情報相) などの教員経験者が閣僚となっていた。

UMNO 地方指導層における教員のシェアの下落が顕著になるのは、1980 年代以降のことである。1981 年の UMNO 党大会においても、地方の各地区から選出される代議員の最

大の職業集団は教員（40%）だったが、1984年大会では教員の比率は32%、1987年大会では19%と凋落の一途を辿った。1987年党大会の代議員のうち、教員に代わって最大の職業集団となったのは、急成長する実業家・企業家（25%）だった。この頃から、「UMNO＝マレー人企業家の政党」というイメージが強まってゆく。新経済政策（NEP）の実施後、マレー人の高学歴化が進み、都市商工業部門への参入が進展したことは、教員の社会的地位の相対的な低下を招いた。また、UMNOのビジネスへの関与が強まり、党内の金権政治が激化するにつれ、豊富な資金力をもつ企業家はますます政治的に有利になった。これらの要因はUMNOの地方指導層における教員のシェアの縮小を促したといえるだろう。

ガファールは1986年から93年まで副首相を務め、小学校教員出身の政治家としては最も頂点に近い地位に到達した。しかし、大学を卒業していないことや、マレー語教育しか受けておらず、英語にあまり堪能ではなかったことは、彼を首相の座から遠ざけるひとつの要因となったと言われている。

UMNO と左派

ガファールの政治的経歴から浮かび上がってくる第二の側面は、UMNOにおける「マレー人左派」の位置づけである。

1940年代後半のマレー民族運動の文脈では、「左派」とは、マラヤ・マレー国民党（PKMM）に代表されるような、マレー諸島の住民を包含しうる包摂的な「ムラユ」概念を唱え、人民主権の原則に立ってマラヤの早期独立とインドネシアとの統合を目指し、社会主義的な志向をもつ革新派を指した。他方、「右派」は、UMNOに代表されるような、半島のマレー王国に基盤を置いた「ムラユ」概念を掲げ、スルタン制の存続を主張しつつ早期独立にはやや慎重で、親英色が強く、インドネシアとの統合には消極的ないし否定的な保守派を意味した。

しかし、実際には、左派と右派との間に必ずしもはっきりとした断絶があったわけではない。左派とされる人たちの間でも、スルタン制の撤廃を要求する者は少数派であり、社会主義やインドネシアとの統合をめぐる立場にも相当の幅があった。他方、右派と見られた人びとの間でも、マレー人の民族的団結、政治参加の拡大や社会経済的地位の向上を訴える者が多かったという点では、左派と共通の志向性を持っていた。人的なネットワークも、両派を横断して存在していたのである。

ガファールは、小学校教員となった1940年ごろから、マレー人左派組織の嚆矢とされるマレー青年連盟（KMM）の運動に参加するようになる。KMMもまた学校教員を重要な基盤のひとつとする組織だった。

日本占領期の1942年6月にKMMは解散を命じられるが、戦後、1945年にKMMの流れを汲むPKMMが結党されると、ガファールは早速これに参加した。1946年にマレー人諸組織の連合体としてUMNOが結党された時、PKMMも一団体として名を連ねたが、独立をめぐる方針の相違から、数ヶ月後にはUMNOを離脱した。完全独立を求めていたガ

ファールは、PKMM と行動を共にした。しかし、1948 年ごろから PKMM の党指導層の逮捕が相次ぎ、1950 年には植民地政府が PKMM を非合法化するに至った。

この時期、PKMM の旧黨員の中には、アブドゥラ・C・D のように、武力革命を志向するマラヤ共産党に入党した者もいたが、ガファール、ムスタファ・フセイン（元 UMNO 総裁候補）やアイシャ・ガニ（元 UMNO 女性部長）のように UMNO に合流する者も少なくなかった。元々、思想的に一枚岩ではなかった UMNO だが、旧 PKMM 黨員の入党により、相当数のマレー人左派を内に抱えることになったのである。ちょうどこの頃、UMNO は独立志向を鮮明化するようになり、1951 年には、党のスローガンを「マレー人よ、永遠なれ」（Hidup Melayu）から「独立」（Merdeka）へ変更した。

実際のところ、ガファールがどの程度まで左翼思想に直接的な影響を受けていたのかは分からない。しかし、農村開発を通じたマレー人の貧困撲滅と社会経済的地位の向上は、UMNO 時代の彼のライフワークのひとつであり、その点において、PKMM 時代の彼の政治志向との連続性を見出すことはできる。

1959 年から 67 年までマラッカ州首相を務めたガファールは、67 年から 71 年までマレー・ブミプトラの経済支援を行なう人民信託評議会（MARA）の総裁を務めた。1970 年に成立したラザク政権では、マレー・ブミプトラの経済的利害に密接に関わるポストである国家・農村開発相に就任した。なお、ガファールを後押ししたラザク首相自身、貴族出身でありながら、イギリス留学時代にイギリス労働党やフェビアン協会の活動に参加したように、社会主義に関心を持っていたことが知られている。また、ラザク政権期には、A・サマッド・イスマイル、アブドゥラ・マジッド、ジェームス・プトゥチェアリに代表される左派知識人が、政策ブレーンとして重要な役割を果たした。しかし、フセイン政権になると、彼らの一部が国内治安法で逮捕されるなど、左派への締め付けが厳しさを増した。

ガファールは、マハティールと対立して副首相を辞任したムサ・ヒタムの後を受けて、1986 年に副首相に就任した。ここで注目されるのは、ガファールがマレーシア政府とマラヤ共産党との間の和平交渉で重要な役割を果たしたことである。1980 年代後半になると、米ソ冷戦構造が溶解する中で、マレーシア国内でも急進左派の影響力は衰退し、マラヤ共産党もほぼ過去の存在となっていた。ガファールは、PKMM 時代に彼の同志だったマラヤ共産党幹部のアブドゥラ・C・D と、87 年以来手紙のやりとりを重ね、89 年の数回に及ぶ和平会談の開催と同年 12 月の和平協定の調印にこぎつけるのに貢献した。ガファールが青年時代に築いた左派人脈が 40 年後に生かされたのである。

貧困家庭出身で教員経験を持つ旧左翼、という現在の UMNO では傍流と化した経歴を持つガファールの死を期に、UMNO 史やマレーシア政治史の中で忘れられがちな一側面を振り返ってみた。なお、ここ数年、PKMM やマラヤ共産党に関わった左派指導者の自伝や回想録が相次いで出版されている。彼らのライフ・ストーリーを通じてマレーシア現代史を別の角度から眺めることは、我々に様々な発見をもたらしてくれるように思う。